



TITLE:

清代における踴布業の經營形態(上)

AUTHOR(S):

横山, 英

---

CITATION:

横山, 英. 清代における踴布業の經營形態(上). 東洋史研究 1960, 19(3): 337-349

ISSUE DATE:

1960-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148189>

RIGHT:

## 清代における踹布業の經營形態（上）

横 山 英

一、はしがき

二、包頭の機能

(1) 踹布請負の獨占

(2) 生産手段と職人の生活資料の準備

(3) 踹布職人の掌握

三、踹布職人の性格（以下次號）

四、布商と踹布業

五、あとがき

### 一 は し が き

小論で分析の對象としている蘇州の踹布業の經營形態については、多くの研究者がこれに注目し、歴史的な評價を加えてきた。わが國では、宮崎市定博士がはやく紹介されたが、最近では寺田隆信氏がこれに論及し、蘇州の踹布業は「包頭とよばれる企業主が職人労働者を使用して經營し

ていたのであつて、その經營形態は、明らかにマニユファクチュアの段階にあつたと考えられる」と述べて清初の經營形態をマニユファクチュアとして把握した見解を提出された。他方、中國でも、數年前から開始された資本主義萌芽に關する諸研究で踹布業が論證の材料となり、阿片戰爭前における棉業部門における特徴的な生産形態として考えられ、マニユファクチュアあるいは「資本主義の萌芽」として評價する見解が一般に承認されている。<sup>(1)</sup>

わが國および中國において、蘇州の踹布業の經營形態を資本主義的要素として出現した新しい生産形態として把握する有力な見解の基礎となつたのは、次に引用する「雍正硃批諭旨」に見える李衛の上奏の一節である。

各省青藍布疋俱於此兌買。染色之後必用大石脚踹呀光。卽有一種之人名包頭。置備菱角樣式巨石・木滾・家伙・房屋。招集踹

匠居住。塾、發柴米銀錢。向客店領布、發礮。每正工價銀一分一釐三毫。皆係各匠所得。按名逐月給包頭銀三錢六分。以償房租・家伙之費。……現在細查蘇州閶門外一帶。充包頭者共有三百四十餘人。設立端坊四百五十餘處。每坊客匠各數十人不等。查其端石已有一萬九百餘塊。人數稱是。(史料一)

從來の見解は、この記事から、包頭を資本家と考え、端匠を雇傭労働者と理解し、一坊で數十人の端布職人が作業に従事しているという末尾の記事を考え合せて、ここに畫かれた端布業を包頭が經營するマニファクトリーであるという結論を導き出したわけである。<sup>(3)</sup>

しかしながら、嚴密にこの記事を検討すれば、このような結論には飛躍と速斷がある。先に筆者がこの記事に觸れた際に經營形態の規定を保留したまま、職人層の性格のみに言及したのは、それがためであつた。即ち、この記事によれば、包頭の端布業に對する關係の仕方は、(一)生産手段と「端匠」の生活資料とを「置備」すること、(二)「端匠」を「招集」し、食費を「塾發」(たてかえ)すること。(三)布商から「領布」して「發礮」すること。四家賃と食費として「端匠」から月額三錢六分を徴收することである。このような形の生産へのタノチの仕方からは、包頭が生産手段

の所有者であり、同時に端布職人を賃労働者として雇傭しているという結論は直接にはでてこない。この記事から引きだしうる事實は、包頭が端布という加工生産の作業過程を組織する役割を果しているということに止まる。

一九五六年冬以後、江蘇省博物館が現存する碑刻の調査を開始し、蒐集された碑刻の主要なものが「江蘇省明清以來碑刻資料選集」(江蘇省博物館編、三聯書店、一九五九、以下では本文、註とも「碑刻集」と略稱する)に掲載され、そのうち、蘇州の端布業に關する碑刻一一種類が新しく紹介された。碑刻は年代的には康熙九年から同治十一年にわたつてゐる。これらの碑刻はすべて經營内容そのものを對象とした記述ではないけれども、斷片的に現われる記述から、經營形態の輪廓を推測し、從來の見解に對する批判的な意見を提出することができる。

端布業は清代を通じて、生産關係内部に含まれている矛盾に基いて、内部的生産關係、特に布商、包頭、端布職人の三者の力關係に應じて、三者の相互關係は變化を示している。この生産關係内部の變化、發展の過程については他の機會にゆずり、<sup>(4)</sup>ここでは、包頭の機能の分析を中心とし

て清代を通じて基本的に維持された生産諸關係について論述し、端布業の生産關係上の特質について再検討したい。

先に引用した「雍正硃批諭旨」に示されているように包頭はいろいろな機能をもつていた。それらの機能を果す人格に對して史料の上では種々の名稱が使用されている。

(1) 作頭 康熙九年の碑刻<sup>6)</sup>には

嗣後一切端工人等。應聽作頭稽查。作頭應聽商家約束。

(史料二)

とある。この「作頭」は、端布職人の監督權と端布請負の權利とを與えられていたもので、包頭と同様のものであることは明らかである。端布作業場は「端作」あるいは「作坊」とよばれ、康熙五九年碑刻<sup>6)</sup>には「端作包頭」の言葉もあり、「作頭」という語が端布請負人に用いられたのである。

(2) 保頭 包頭は端布注文を受けたかぎり、注文主に對し端布の責任をもつわけであるが、そのことについて康熙三二年碑刻<sup>6)</sup>は

至于端匠。如有拐窃盜逃。爲非作歹。責成保頭。與字號・染坊店主無涉。(史料三)

と述べている。「保頭」は端布職人が棉布をもちにげた

場合には全責任を注文主に負わねばならない請負人であつた。これもまた包頭と同じものである。

(3) 坊戸 道光一二年碑刻<sup>6)</sup>に

爲此示仰六坊坊戸人等知悉。嗣後爾等領端布疋。毋許再立隨牌名目。(史料四)

とある。ここで使われている「坊戸」が包頭と同じ機能をもつものであることは説明を加えるまでもない。「坊戸」の語は、史料の上では康熙末年以後あらわれてきて、この呼稱の出現以後、包頭の呼名が姿を消す。「坊戸」の呼稱は、康熙四〇年に端布職人の取締りのため、官憲の命令に基いて、包頭十人の中一人を選んで「坊長」を選出することが規定され、また康熙五九年に各坊ごとに「坊長」が設置されたこと(詳細は後述)に起源をもつものと思われ、官憲的な息のある呼名である。後述のように、「坊長制」の實施は端布業に性格上の變容を與えたものであつて、包頭の呼稱が官憲風の「坊戸」に變つたことは一つの意味をもつている。

(4) 坊主 乾隆四四年に、蘇州府では端布職人の要請によつて加工賃に「薪菜米銀」を附加することを認めた<sup>6)</sup>。その

際、布商が「坊主」にも「伙食銀」一兩（錢八二〇文）を支拂うべきことを規定し、その理由として

坊主開設作坊。一切動用家伙。均須置辦。（史料五）

とのべている。即ち「坊主」は踹布作業場を設け、職人の食住の面倒を見ているわけであつて、これまた包頭の機能に外ならない。

以上のように踹布の請負人であり、踹布業の組織者である仲介人は、種々の名前ではばれているが、いずれも同一のものを指したものである。史料の上では、「雍正硃批諭旨」の外、「碑刻集」所收の碑刻資料の多くは、包頭の名稱を用いているので、小論においては包頭の呼稱に統一して使用し、踹布業の組織者である包頭の性格を把握することによつて、踹布業の經營形態を明らかにする。

清初において、すでに蘇州府下には包頭が相當數いたことは事實である。康熙五十九年に坊總制が施かれ、包頭一二戸を一甲に編成し、各甲に甲長一人を任命した。この時の甲長の總數は二二人であつた。その外に包頭中から「老誠練達者」を選んで坊總に任じ、甲の綜括的な管轄に當らせた。この時の坊總は一二人であつた。この數字を基礎に包

頭の數を算出すると二七五人となる。毎甲必ずしも一二戸と機械的になつていない場合を考慮しても、この數字は大體事實に則したものであつたであらう。ただ、この數字は、同じ碑刻に、包頭が三百餘戸あるという記事と異るが、先の二七五人は長洲縣と吳江縣内の包頭であつて、元和縣内の包頭を合算すると三百餘人になつたのではないかと思われる。雍正八年の李衛の上奏（史料一）では、蘇州府下に三六〇餘人の包頭がいたと報じている。包頭が同業仲間のギルトを結成していたかどうかは史料上で檢證できないが、三百人をこえる包頭が存在して、一萬數百人の踹布職人を掌握し、重要な産業部門の一つを擔當したのであるから、包頭は有力な社會層を形成していたと想像することが許されるであらう。

包頭はどのような社會的階層から形成されていたかは明らかでない。しかし、種々の史料から大體の推定を下すことができる。康熙三二年碑刻には、

踹匠皆系脅力兇悍之輩。俱非有家土著之民。散漫無稽。盜逃匿測。且異方雜處。奸究易生。故擇有身家之人。踹坊領袖轉給。則踹匠之來歷。貨物之失錯。悉與布商無預。責有攸歸。

と述べている所より考えれば、踰布請負人は「有身家之人」であつた。この表現は、單に、一家を構えた者という形になつてゐるが、全體の文章からみると、包頭は、布商から棉布を預つて、「貨物之失錯」などに對して、全責任を布商に對して取り得るものでなければならなかつた。そのような社會的信用が必要であつたのである。

そして、この社會的信用は、經濟的な裏付けが主な内容であつた。先に引用した李衛の上奏（史料一）が述べてゐるように、包頭は踰布のための生産手段を準備し、職人の住居費、食事代を立て替える必要があつた。數十人の職人を掌握しておくためには、それだけでも相當の資金を要した。しかも、職人の住居費、食費は毎月職人から徴収するのが立て前ではあつたが、實際には布商からの加工賃の支拂いは年三回の決算拂いになつてゐたから、包頭は常に數カ月分の賃銀をプールしておかねばならなかつた。このような資金繰りの點からも、相當の資産を所有してゐたことが推測できる。また、包頭の布商に對する責任上からいつても、職人の持ち逃げや毀損など最悪の場合には、棉布の辨償を行うことも豫想されねばならなかつた。包頭は相當

額の財産を所有し、それに裏付けされた社會的信用を必要としたのである。次節に分析する包頭の諸機能は、このような經濟的・社會的バックを基礎として遂行し得た。

## 二 包頭の機能

### 1 踰布請負の獨占

「發礮」即ち加工原料である棉布を踰布業の勞働過程に投入することが、包頭の社會的機能の一つである。そしてその投入の仕方は、包頭自身がこの原料の所有者としてあらわれているわけではない。包頭は布商でもなく、また、布商または染坊から「領布」した時點で包頭が棉布＝踰布原料を商品として購入し、包頭自身の計算に基いて踰布生産を行つてゐるわけでもない。先に引用した「保頭」に關する史料（史料三）が明示するように、包頭は注文主に踰布の責任を負つてゐるが、その責任は、例えば職人が持ち逃げや窃盜を行つた際には注文主に對して責任をとらねばならない如きものであつた。

包頭は注文主から踰布注文を請負う際には、康熙九年碑刻が「作頭應聽商家約束」（史料三）とのべているように

契約を結んで加工を引きうけた。道光一四年碑刻は「字號」と包頭との關係について次のように詳しく述べている。

查坊戸領端布匹。先由同業互保。寫立承攬交號。然後立折領端。其所立經折。不過登記布數。(史料六)

即ち、包頭は「字號」に對して、同業者の共同保證をした保證書を提出して端布注文引き受けの契約關係を結び、その後、注文引き受けに應じて加工契約をしたのである。この手續きから、包頭の「字號」に對する責任も發生したわけである。

このように、生産のプロセスの上で、包頭は布商または染店などの注文主と端布業との間に介在する媒介者の役割を果していたもので、仲介的な請負人であつた。

康熙九年の碑刻(史料三)が「作頭應聽商家約束」と規定しているように、包頭は端布請負の特權を與えられていた。従つて、布商または染店など、「字號」と稱された商家は端布注文を直接に端布職人に請負わすことができない。包頭は獨占權を掌握していた。この碑刻文は布商が蘇州府に建議し、それが承認された結果、布商二人の連名で公示(建立)した規定である。清代を通じて包頭の獨占

權は布商と官憲とによつて保證されていた。布商が包頭に端布請負の獨占權を附與することは、實は布商が自身の利益を守り、損害を避けるために有効な方法であつて、康熙三二年碑刻(史料三)に明示されたように、包頭は獨占權の代償として、端布の全責任を負うこととなつた。同じ康熙三二年碑刻は、端布職人は兇暴な連中が多く、掌握しにくいことを述べた後、次のように記している。

故擇有身家之人。端坊領布轉給。則端匠之來歷。貨物之失錯。悉與布商無預。責有攸歸。

この記事から明らかなように、「有身家之人」即ち包頭に端布獨占權を與えた狙いは、端布にまわされた棉布に對してその工程が完成するまでの間、責任の所在を明らかにすることにあつた。このようにすれば、布商は端布過程で發生したあらゆる損害を避けることができる仕組みであつた。更にまた、後に觸れるように、布商は包頭をツイタテとして非常にしばしば強い加工賃値上げ要求を掲げた端布職人の管理を行い、コストの値上げ、不良加工、作業の停滯、その他の損失を避けたのである。この康熙三二年碑刻の史料も、布商の建議に基いて布告された蘇州府の政令

で、布商七六人の連名によつて建立された碑刻の一節である。

勿論、端布請負の獨占權を掌握していることは包頭自身にとつても有利であつたことはいふまでもない。布商が包頭を選択することはできたけれども、端布請負の排他的な特權を包頭が保障されている限り、包頭の利益も保障されていることであつて、個々の包頭の浮沈はあつたとしても、包頭全體としてはその職業的地位は安定していた。ただ、包頭の獨占權が布商のイニシアティブによつて、官憲の名において與えられた保障であつた限り、包頭の利益を完全に擁護したものはなりえなかつた。しかし、包頭の獨占權の強化は包頭の社會的地位を保障し、強化することの意味し、獨占權に附屬した端布職人取締りの特權が官制的に整備され、その責任を包頭がもつに伴つて、包頭の自主的な發言權や營業の自立が表面化してくるわけで、康熙末年を境として、包頭の端布業支配が強まり、同時に布商に對して強い要求を提出し、その實現を着々獲得していくのである。<sup>64)</sup>

しかし、このような包頭の獨占權、および端布業におけ

る自主的な發言權の漸次的向上も、前述のような包頭の機能に變化をもたらすものではなかつた。あくまでも仲介的な請負人としての包頭の利益擁護と地位の向上であつた。

## 2 生産手段と職人の生活資料の準備

康熙三十一年に端布職人が加工賃の値上げを要求して騒動を起こし、その收拾後、翌年に布商七六人の連名によつて、加工賃規定に關する政令が碑に刻んで公示された。<sup>65)</sup>その中で、包頭も端布を行う上で「もとで」がかかつていることを強調し、職人の加工賃値上げを許さない理由を説明した文章の一節に

又緣端匠孤身赤漢。一無携帶。保頭租賃房屋。備買□□□□  
銀參錢陸分。是亦有本。(史料七)

とある。この文章では「保頭」が賃借している房屋が、作業場なのか、または職人の住居なのか不明であり、また、五文字が不明であるため、「保頭」が支拂うべき三錢六分が房屋の借料だけなのかどうか、が判明しない。しかし、同じ碑記の末尾に見える次の記事と照合すれば、内容が明らかとなる。

嗣後端布工價。條遵憲□每疋壹分壹厘。端石坊戸。每月得賃石租銀參錢六分。永遠成例。毋容増減。至于端匠如有拐窃盜逃。



爲非作歹。責成保頭。(史料八)

この文中では、先の引用史料に見えた三錢六分は「賃石租」という名目であらわれており、しかもその「賃石租」を受け取るのは、「踰石坊戸」があつて、「保頭」ではない。「保頭」は「踰石坊戸」に對して三錢六分を支拂う立場にいる。

以上の實證から、包頭が賃借している房屋が作業場であるか職人の住居であるかは不明としても、とにかく房屋と踰布業の主要な生産手段である踰石とを賃借していることが判明した。ところが、同治一年の碑刻に見える次の文章を検討することによつて、房屋の問題を明らかにする。

今議暫照舊章現錢之例外。加每匹三文五毫。以作坊戸房金石租各項開銷之用。

この碑記は、包頭が加工賃の値上げを布商に要求して、布商と包頭との協議の結果決定した値上げ規定である。従來加工賃は一匹につき銀一分四厘であつたが、職人に與える加工賃は据置きのみであるが、それ以外に包頭に對して一匹につき三文五毫を給付することになった。その名目

は、包頭が房屋代や踰石借料などの出費に當てるためであると明記している。踰石の借料を支拂う問題は先の康熙三年碑刻で明らかとなつた。問題は房屋が作業場か職人の住居であるかである。雍正硃批諭旨の李衛の上奏(史料一)では、職人は包頭に毎月「房屋家伙之費」を三錢六分支拂うことをのべており、職人の住居の借料は職人の負擔となつてゐる。この同治一年碑刻に見える「房金」は包頭が支拂う家屋借料であつて、職人の住居のための借料ではない。従つて、ここでのいう「房金」は、踰布作業場の借料と判斷しうる。包頭は踰石のみならず、作業場をも賃借していたことが史料によつて實證できるのである。

史料(六)によれば、包頭は銀三錢六分を「賃石租」として支拂つており、史料(七)では同じ金額の支出について房屋の賃借を問題にしているところから考えれば、包頭は作業場および、それに附置された踰石、その他の生産手段の借料として、職人一人當り毎月三錢六分を支拂つていたものと推測される。

以上によつて、包頭は作業場、踰石などの生産手段を所有しているのではなくて、「踰石坊戸」から月計算で賃借

し、これを端布職人に提供していたことを知ることができた。大正二年（一九一三年）の東京蠶業講習所長本多岩次郎氏の蠶絲業に關する調査報告によれば、上海における器械制製絲業においては、工場の所有と經營とが分離して、工場の賃借が一般的に行われていた。その賃借は簡單な方法で行われ、工場は一切の生産設備を含んで賃借され、賃借代は一釜につきいくらと決められていた。借り受けに當つては、一定の借受期限を定め、前金で借り受ける。借り受け中の家屋の破損、器械の修理は大體において貸主が責任を負い、小修理だけは借主が行うのを普通としていた。包頭の生産手段に對する關係もこれと同様の性格をもつていたわけである。包頭が生産手段を所有することができないわけはなく、あるいは、そのような場合があつたかも知れない。しかし、史料の上では、それを推測することができない。恐らく、生産手段の所有者は、不動産の貸付けによつて、端布生産から生ずる剩餘價值の一部を包頭を通じて收得する立場を變えなかつたものと思われる。

ところで、先に引用した康熙三二年碑刻（史料七）が述べているように、端布職人は裸一貫で蘇州に流れこんでき

た單身の出稼人である。従つて、職人を端布業に結合させ、勞働力を確保するためには、まず何よりも職人の住居と飯とを準備することが必要であつた。勞働力の掌握は包頭の機能の重要な一つであつた。そのため包頭は職人の住居と食事を用意した。李衛の上奏（史料一）は包頭が端布などの生産手段のほか、「家伙・房屋」を「置備」と述べており、乾隆四四年の碑刻は、

坊主開設作坊。一切動用家伙。均須置辦。（史料五）

とのべている。この碑刻に示された規定では、包頭は「伙食銀」という名目で布商から毎月一兩（錢八二〇文）を支給されることになつたが、この「伙食銀」は職人からの加工賃値上げ要請によつて決定されたもので、實質的な賃上げを意味し、職人達の食費の補助（職人の包頭への支拂額の値上げを防ぐための）という意味をもつていた。

李衛の上奏（史料一）によれば、包頭は端布職人を集めて、「柴米銀錢」を立て替え（墊發）ているのであつて、集團的な「飯場」あるいは寄宿舎の如きものを準備していたのかどうかは不明であるが、食費や住居を前貸しすることによつて、職人の食住を保證し、勞働力を掌握してい

た。これが包頭の物質的基礎の大きなものであつた。職人は毎月「房租・家炊之費」として三錢六分を包頭に支拂つていたのである。「飯場」あるいは住居を包頭が所有していたのかどうかは全く推測できないが、日華事變中の華北地帯の鑛山における把头制の實態研究によれば、把头は食事の賄をおこない、それからの収益が把头收入の重要な部分になつていた（藤本武「把头炊事の研究」、中村孝俊「把头制度の研究」）。踰布業において、把头自身が賄を行つたのかどうかは不明としても、職人がすべて毎月一定額の住居費と食費を支拂つていたことから考えれば、集團的な生活を行い、同一の生活條件下にあつたものと判断せざるを得ない。また、康熙四〇年の碑刻では、職人の集團的暴動を警戒するために夜間の外出を禁止しており、次いで康熙五九年碑刻では晝夜にかかわらず、職人の外出を禁止した。このような禁止令が實施されうるためには、作業場では集合的な集團を作つていたので問題はないが、就業中以外の日常生活においても、集合的な形態をとつていることが前提でなければならない。

雍正八年の李衛の上奏（史料一）で、把头が「菱角様式

巨石・木滾・家炊・房屋」即ち生産手段と職人の生活資料とを「置備」し、職人を招集して居住せしめると報告しているのは、具體的には以上のような事實を意味しているのであつて、把头は生産手段と勞働力とを結合さす役割を、その機能の一つとしてもつていたのである。そして、その場合の結合のさせ方は、仲介者としてのやり方であつた。

### 3 踰布職人の掌握

把头は職人を集め、住居と食事を準備して踰布勞働に従事させた。次の項で述べるように、職人は把头に雇傭された賃勞働者ではなかつた。しかし、職人が獨立手工業者であつたと割り切ることは困難である。職人は生産手段のみでなく、住居および生活資料の前借を受け、また、把头が踰布請負の獨占權を把握していたので、仕事は把头を通じてのみもちうることができたわけで、職人は現實的に把头に従屬した立場をとつていた。乾隆六〇年碑刻によれば、踰布加工賃は把头に一括して布商から支拂われ、把头のピンはねも起り得たわけで、賃銀支拂いの面でも職人の獨立性は著るしく阻害されていた。

しかし、把头が事實上において職人を支配しているにも

かわらず、職人の管理、掌握はこれだけでは困難であつた。雍正年間の記録（史料一）によれば、當時、包頭は三四〇餘人で、彼等は蘇州の閶門外一帯の地域におり、職人は踰石の數とほぼ同じく一〇九〇〇人餘りであつた（雍正元年四月の胡鳳翬の上奏では二萬餘人と述べている）から、一人の包頭の支配する職人は平均して約三〇人にも達した。また、一人の包頭が支配する職人が必ずしも同一の仕事場に集まつていたわけではなく、康熙五十九年碑刻に「身等同爲包頭。約有三百餘戶。或有兩作。或有三坊」と述べているように、多數の職人を配下にもつている場合は、數ヶ所に分散していた。李衛の上奏によれば（史料一）、一作業場には數十人の職人を收容できたから、二カ所あるいは三カ所の作業場を使用している有力な包頭の場合では、配下の職人數は相當の人數に上つたはずである。その上、職人は單身の出稼人であつた。従つて包頭が職人の身元の把握や行動の監視を現實的な支配關係だけを利用して嚴密に行うことは容易ではないのが實情であつた。ここに、包頭が職人支配のために官憲の權力を援用する理由があつた。

踰布職人の管理・監視を行う強制力の強化は包頭の要望でもあつたが、しかし、最も強い關心を抱いたのは布商であつた。包頭に與えた踰布請負の構能を完全に果させるために包頭のもつていた事實上の職人支配力を基礎にし、それを利用して包頭を職人の管理人に仕あげ、これに公的な抱束力をもたせた。布商の建議にもとづいて公示した康熙九年の政令（史料二）は、包頭の踰布請負の獨占權を保障すると同時に「嗣後一切踰布工人等、應聽作頭稽查」と包頭の職人に對する管理權を附與し、また、康熙四〇年碑刻は切蘇郡出產布貨。所用踰匠盈萬成千。俱責包頭約束。と繰り返し規定している。

康熙初年以來、職人はしばしば加工賃の値上げを要求して集團行動に訴えた。職人の爭議を防ぐことは、布商にとつては、踰布加工をスムーズに進捗させ、また、加工賃の値上げを防止する觀點から、最大の關心事であつた。また、官憲は、踰布職人を「率多單身烏合。不守本分之輩。因其聚衆勢合。姦良不一」（雍正八年七月、李衛の上奏）、「凡遇盜案發覺。常有踰匠在內」（雍正元年四月、胡鳳翬の上奏、共に雍正硃批諭旨）、と不信感をもつて把握してい

たわけで、集團行動や「煽惑」を防ぐために職人を監視し警戒することは、治安維持上必要なものと考えていた。布商と官憲との利害の一致、というよりは、布商の利益を擁護するために官憲が權力を發動して、職人管轄の義務とその裏付けとしての法制的權力を包頭に強制したものであった。包頭自身の利益を守るためにも、職人の管理權の法的規定は包頭にとつても歓迎すべきものであった。

このようにして、康熙四〇年には包頭を編成して「坊長制」を實施し、更に、康熙五九年には「坊總制」を施行し、包頭を權力機關の末端に組織して、包頭の職人支配權を強化すると共に、職人の管理・監督の警察的義務と權利とを附與した。布商と包頭と官憲の三者の一致した要求から、包頭の職人支配が法制化されたわけである。この支配力は、包頭が勞働力を生産手段に結合させ、端布請負を遂行するために不可欠の要素となつたのであり、その責任は包頭が一身に引き受けていたのである。

# 註

- (1) 寺田隆信「蘇・松地方における都市の棉業商人について」(史林、四一の六)。

- (2) 「資本主義萌芽問題討論集」(三聯書店、上・下) 所收論文參照。
- (3) 早くこの史料を紹介された宮崎市定教授は、この引用文を日本譯し、「即有一種之人名包頭」の箇所を「包頭たる資本家があつて」と譯出されている。(「明清時代の蘇州と輕工業の發達」東方學第二輯) 同教授は慎重にも經營形態についての評價は避けておられるが、包頭を資本家と考えることは史料評價の上で混亂を招きやすい。
- (4) 拙稿「中國における手工業勞働者の發展と役割」(歴史學研究、一六〇號)。
- (5) 拙稿「清代における端布業の推轉過程」(未發表)。
- (6) 奉督撫各大憲核定端匠工價給銀永遵碑記(「碑刻集」所收)。
- (7) 尙、「碑刻集」所收資料はすべて現代の簡化漢字に書きかえられているが小論では舊字體にして訂正して引用した。
- (8) 長吳二縣端匠條約碑(同上)。
- (9) 蘇州府處理端匠羅貴等聚衆行凶肆凶科斂一案并規定以後端布工價數目碑(同上)。
- (10) 吳縣永禁六坊坊戶領端布足母得再立隨牌名目應聽鋪號自行發端不得壟斷把持碑記(同上)。
- (11) 蘇州府規定端匠每布一疋工價連薪菜米加等計銀一分三厘該商等給發坊主伙食銀一兩給錢八百二十文以後不許增加碑記(同上)。
- (12) 註(7)碑刻。詳しくは、註(5)拙稿。
- (13) 註(8)碑刻。
- 蘇州府規定端價每疋銀一分四厘九八兌九六色大小加頭在外立

折登記統歸三節結算布業坊戸條各遵照不准把持尅減碑記（「碑刻集」所收）。

- (14) 蘇州府爲布商坊戸應照章聽號擇坊發端不得無端另換致碍貧民生計出示碑記（同上）。

- (15) 註(9)碑刻。

- (16) 註(5)拙稿參照。

- (17) 註(8)碑刻。

- (18) 註(13)碑刻。

- (19) 農商務省農務局「朝鮮支那、蠶絲業概観」（大正二年發行）

- 二〇九頁。

- (20) 遵奉督撫各憲定例永禁碑記（「碑刻集」所收）。

- (21) 註(7)碑刻。

- (22) 同右。

- (23) 康熙四〇年碑刻（註(20)碑刻）によれば、職人が包頭のピンはねに抗議してゼネストを行ない、騒動は一年に亘つて繼續した。この收拾後、政令によつて包頭のピンはねが嚴重に禁止された。

- (24) 註(7)碑刻。

- (25) 註(17)碑刻。

- (26) 註(5)拙稿に評論。

- (27) 同右。

## 東洋史研究叢刊

既刊

- 第一 \* 九品官人法の研究 宮崎市定著 一、一〇〇圓

- 第二 \* 清代鹽政の研究 佐伯 富著 一、一〇〇圓

- 第三之一・二 羽田博士史學論文集（上卷歷史篇・下卷言語宗教篇） 羽田 亨著 下上 一、六〇〇圓  
二、〇〇〇圓

第四之一 \* アジア史研究 第一 宮崎市定著 一、三〇〇圓

- 第四之二 アジア史研究 第二 宮崎市定著 一、五〇〇圓

- 第五之一・二 古代チベット史研究 上・下 佐藤 長著 一、一〇〇圓  
二、二〇〇圓

- 第六 契丹古代史の研究 愛宕松男著 九〇〇圓

- 第七 中國隨筆雜著索引 佐伯 富編 二、五〇〇圓

- 第八 清末政治思想研究 小野川秀美著 一、一〇〇圓

- 第九 中國近代工業史の研究 波多野善大著

續刊

- \* 近日再版の豫定

東洋史研究會

## **Government-Owned Fields (官田) in South China under the Ming 明**

*Masao Mori*

The cultivated fields owned by the Ming Government in south China, especially in the fluvial regions of the Yangtze, were enormous; in 1391 about 63% of all cultivated fields in Suchou 蘇州 Prefecture was government-owned, while approximately 84% in Sungchiang 松江. In Suchou the ratio of crop dues from the government-owned fields against the whole crop dues amounted to 95%, while in Sungchiang 94%. This shows that in the early Ming period agricultural exploitation by the government was largely carried out through government ownership. Though the rate of dues from government-owned fields (on average 4.369 tou 斗 per mou 畝 in Suchou and 3.09 in Sungchiang) was considerably higher than that from privately owned fields, it was much lower than the rate of farm rent which often reached over one shih 石 per mou. There were other favorable conditions for tenant farmers of government-owned fields such as exemption from, or reduction of, covées and facilities for transportation. Taking these into consideration, tenants of government-owned lands enjoyed privileges as compared with those working for landlords who exacted more than one shih per mou as tenancy. Part of the government-owned land was tenanted even by landholding farmers and landlords. The collapse during 1426-1435 of the government ownership system, as seen in the decrease of dues from Suchou and Sungchiang, was due to not only the shifting of political center to north China but the extremely heavy burdens to be born by the peasantry. Considerable influence was exercised down to the early 16th century by the government ownership system over the form and structure of landownership.

## **On the Cotton-Sizing Industry in Ch'ing 清 China**

*Suguru Yokoyama*

Cotton-sizing was developed in Suchou 蘇州 under the Ch'ing 清,

where a few cotton merchants were running their business on a large scale ; there were approximately 450 mills, 360 operating agents, and over 10,000 workers. The operating agent was called pao-t'ou 包頭. Not a few scholars regarded the operating agent system as prototype of the capitalistic production system, but the present author proposes a different interpretation based on some new material recently found in Suchou. The operating agent enjoyed license for sizing the cotton cloth, equipped the mill with instruments, and provided the workers with lodging in the form of advancement. The mill was leased on a monthly basis. Nevertheless, he was in no sense a "capitalist" because he himself did not employ workers, who were paid by the cotton merchant on a piece work basis. There was another characteristic of the enterprise ; though it was a private business, the cotton-sizing industry was under the control of the local government which regulated the duties of the operating agent as well as wages for workers. The industry may be regarded as a kind of deformity caused by the peculiar nature of production facilities, i.e., home industry.

### **Wênkuan (Archives) 文館 in the Early Years of Ch'ing 清**

*Nobuo Kanda*

The *Wênkuan* or archives was a government agency in the early Ch'ing period ; it was often called *shufang* 書房. The *Wênkuan* is said to have been set up as early as 1629. But officially it appeared first in the *Ta Ch'ing Huitien Shihli* 大清會典事例 compiled during the Chiach'ing 嘉慶 era (1796-1820). The so-called reference to the *Wênkuan* found in the Veritable Records of T'aitung 太宗 tells us merely that the court literati were divided into two sections, one for translation and the other for documentation. Though the name of *Wênkuan* first appeared in 1629, an investigation of its personnel seems to indicate that it had existed before that year. Translation and documentation were already practised in the early days of the reign of Nurhachi, and contact with Mongols and Koreans on the one hand and the Ch'ing Government's own needs on the other led